

## 「プラハの春」半世紀の感傷

プラハは今も揺れているか？

エッセイスト 近藤節夫

はじめに

今からちょうど半世紀前世界中をあっと言わせた「プラハの春」を思い起こす時、センチメンタルな気持ちとともに心の痛みがふっと甦ってくる。その当時独りよがりな心情から事件に巻き込まれた心境になり、気持ちと行動が翻弄される事態に追い込まれてしまった。勤務していた会社を辞めてプラハへ留学する意志まで固めていながら、突然ワルシャワ軍戦車部隊のプラハへ侵攻による「プラハの春」挫折によって心に期した計画を台無しにされ、苦悩の末留学を断念して辞表を取り下げる屈辱と悔しさを舐めさせられた。その後チェコスロバキアへは4度訪れたが、その都度不思議な異変に遭遇したのもチェコとの穏やかならぬ因縁によるものではないかと考えることがある。

今日までチェコに関った50年に至る長い歳月を振り返ると感傷的な感情に駆られるのも宣なるかなと思う。この半世紀を回顧しつつ「プラハの春」を想うと、今も変わらぬチェコへの憧憬とともに、喜怒哀楽混在した幾多の出来事が懐かしく思い出されてくる。

「プラハの春」の屈折を経て23年後に遅しく「ピロード革命」を成し遂げて国を再生させ、自由と民主化を取り戻したチェコスロバキア国民の弛まぬ努力に敬意を払いつつ、そこへ至るトレースを辿り、あの時代の世界の時流と動きを個人的な関りも思い浮かべながら、再びロシアの影響と対応により少なからず揺り戻しが来ている現状について、今日の視点から考えてみたい。

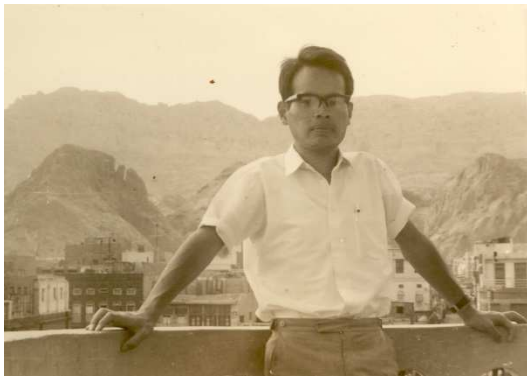
### 1. 1968年、トラブルの年明け

「光陰流水の如し」

1968年8月20日深夜、ソ連軍指揮下のワルシャワ条約機構軍によるチェコスロバキアの首都プラハへの電撃的な侵攻が世界を震撼させてから、瞬く間に半世紀が経過した。あの時代西欧諸国はもとより、社会主義国家の中にもソ連の横暴を非難する国もあった。とりわけ社会主義国家建設の途上にあつた毛沢東主席率いる中国共産党は、ソ連軍のチェコスロバキア侵攻を「覇権主義」として厳しく非難し、それが翌69年には中ソ国境紛争にまで発展し、その後中ソ対立を修復不可能な状態に追い込んだほどである。

私自身にとつても「プラハの春」は、他人事ではなく身の上に降りかかった事件として殊更印象深く、人生の転機ともなった忘れがたい衝撃的な事件と言える。今振り返って幾ばくかの感慨を覚えずにはいられない。

「プラハの春」が発生したのは、メキシコ・オリンピックが開催さ



(上) 岩山に囲まれたアデンのホテルにて

(下) 独立のお祝い気分冷めやらぬアデン市内

れた年だった。その年は私にとっても尋常ならぬ年明けとなった。1月11日、その日入国しようとしていたアラビア半島の突端、紅海の入口にある大英帝国の植民地アデンは、新国家船出を祝い記念すべき1日となる筈だった。その独立記念日に合わせてアデンへ入国すべく準備万端整え、その時を心待ちにしていた。当日アデンは宗主国イギリスから厳しい対英独立闘争と内戦を経て新国家として独立することになり、私はその独立の祝いと喜びをアデン国民とともに分かち合いたいと願った。この日ひとりエチオピアからアデンへ向かったのだった。ところが、その前日現実はいちも奇らぬ事態となっていることを耳にして少し気がかりにはなっていた。案の定、事は筋書き通りには

運ばなかった。アデンはその42日前の前年11月30日に突如繰り上げて独立を果たし、1月11日にはすでに新しい国家「南イエメン人民共和国」(現イエメン共和国)となっていたのである。搭乗予定の前日になって航空会社エア・ジブッティのアジスアベバ(エチオピア)支店でその事実を初めて知らされ驚いたが、その時格別入国に否定的な話は聞かされなかった。予定通り11日アデンへ向けて発った。

しかし、到着したアデン空港入国管理官から、旅行前に駐日イギリス大使館で取得した入国ビザを無効とされ入国を拒絶されてしまったのである。大使館では、不誠実にも入国ビザ申請の1週間後にはビザ申請の対象国アデンが独立し、イギリス支配の手から離れるという直近の重要な情報を近々入国しようとしている私に一言も話してくれなかった。降ってわいたようなトラブルに嘔然として、暫しその場に立ち尽くすばかりだった。その瞬間は不意にわが身に降りかかったトラブルに対してどう対応して好いか分からず、入国事務所を周りをたたくまでもなくぶらぶらしているだけだった。その時檻の中の熊ならぬ私の打ち萎れた姿を見るに見かねたのか、航空会社のスタッフが改めて新国家のビザを緊急申請するようアドバイスしてビザ取得に手を貸してくれた。幸いにもその場で新国家のビザが発給されたことにより、どうにか誕生間もない新国家「南イエメン人民共和国」へ入国することができた。こうして新独立国家への日本人入国者第1号となったのである。

## 2. 「プラハの春」チェコスロバキア民主化への息吹

ちょうどその頃チェコスロバキアでは、国内に押さえつけられていたソ連主導の社会主義同盟国のくびきから逃れ、文化人ら知識層を中心に自由、平等と民主化を希求する独自の政治的、社会的動きが穏やかに表面化しつつあった。かねてからソ連の社会主義国家に対する独善的リーダーシップに対する不満と反発が鬱積し、それが徐々に吹き出し、同時に劇作家ヴァーツラフ・ハヴェル（ビロード革命のリーダー・チェコ初代大統領）や作家パヴェル・コホウトら国内知識層が「人間の顔をした社会主義」をスローガンとして唱え始め、体制内改革の空気が沸々と湧き上がっていた。

偶々私がアデンに悪戦苦闘の末入国した68年1月、共産党第1書記に就任したアレクサンデル・ドゥプチェクは、チェコスロバキア共産党中央委員会総会において6項目からなる「行動綱領」を発表した。それはこれまでソ連が締め付けていた共産党1党独裁による社会主義国家間の連帯を明らかに牽制するものだった。綱領の骨子には、共産党への権限の一元的集中の是正、市場機能の導入などの経済改革、言論と芸術活動の自由、西側との経済関係の強化などが盛り込まれていた。「行動綱領」は、ソ連のみならず連帯を掲げていた他の社会主義国家にとっても穏やかならぬ動きであり、明らかにソ連を中心とする社会主義一枚岩体制を揺るがすものであった。チェコスロバキアにとって先行きの社会主義国家体制崩壊の始まりとも言えるものだった。「行動綱領」を受けて労働組合、青年組織、非共産系政治組織などが活動を顕在化させていった。

スターリンの生前、社会主義国家はそれぞれ固い団結を誇っていた

が、1956年フルシチョフ共産党第1書記による衝撃的なスターリン批判以来、社会主義国家間の結束には次第に綻びが目立つようになった。中でもポーランドやハンガリーでは国内体制が揺らぎ、国内の共産党政権に対するデモの発生に応じたソ連軍の介入と弾圧により、国内にはソ連の抑圧的な意向が強く反映されるようになった。

チェコスロバキアのドゥプチェク共産党第1書記は、68年5月開催の共産党中央委員会総会で、国内に漂う反ソ連の空気を東欧同盟国に配慮する形で、右派修正主義の危険性をアピールしつつ、挑戦的な態度を控えて自国の考えと歩む道を徐々に訴えていた。そのうえで6月「行動綱領」になぞらえ民主化や自由を訴えた「二千語宣言」を発表した。これをソ連は反革命の兆候と受け取ったのである。ソ連にとってはまさに時限爆弾とも思えるチェコスロバキアの国内情勢だった。ソ連に同調する東欧圏内の同盟国でもドゥプチェク第1書記や作家らの文化人に対する抵抗が強まり、周囲からチェコスロバキアへの圧力が強まって行った。

### 3. プラハ留学計画、そして中止の決断

このチェコスロバキア国内が不安定な政治状況の中で、桜咲く季節になって私は思い切っかねがね考えていたプラハへ留学する決心を固めた。時期的には決して最善と言えないタイミングではなかったが、逆に考えれば、このやや混乱しかけた時代こそ、むしろチェコスロバキアで実証的に社会主義の理念と実態を学べる機会を得られる

のではないかと考え、留学の決断をしたのである。

学生時代60年安保闘争に参加して以来、ベトナム反戦運動など社会的な分野で活動し、大学では社会思想史と社会主義経済学を学び、卒業論も「河上肇論」に取り組みまとめた。カール・マルクスの科学的社会主義に傾倒して、マルクスが唱える民主、自由、平等を標榜する、階級制のない理想的な社会主義国家建設に強い関心を抱いた。その当時社会主義国家チェコスロバキアには、自由の息吹が胎動して自由を求める市民と、マルクシズムから乖離しつつあった共産党1党独裁指導部との相剋により国内は揺れていた。しかし、長い年月に亘り誇り高く守られてきたモルダウ川が滔々と流れる中世の都市、「百塔の街」プラハで、マルクス経済学を本格的に研究してみたいとの気持ちが次第に強まっていった。将来社会主義経済学の研究者になってみたい気持ちとそのための進路を考え、思い切って勤めていた鉄道会社を辞めて首都プラハにある14世紀創建の歴史ある名門カレル大学への留学を思い立った。会社へはすでに辞表を提出し渡航準備も整え、翌9月プラハへ出発の日を待つばかりとなっていた。

その旅立ちの直前1か月前の8月21日朝、出勤前に突然臨時ニュースで腰を抜かすような驚愕的な事実を知った。あるまいことか、その僅か数時間前(現地時間8月20日深夜)に留学予定地のプラハ市内にワルシャワ軍戦車部隊が国際法を無視して大挙進軍し、プラハ市民からそれほど強い抵抗を受けることもなく、美しいプラハ市内を占拠してしまったのだ。ドウプチェクら党指導者は身柄を拘束され、モスクワに移送された。

出勤の途次心理的に大きなショックを引き摺っていたが、まだ正確な情報は分からなかった。しかし、まだ見ぬプラハはこの先どうなるのだろうか、そして私自身のプラハ留学は現実になるのだろうか、不安と憂鬱のあまり気持ち



対立するワルシャワ軍とプラハ市民 (Wikipediaより)

ちは落ち着かなかった。夜になり時間の経過とともにプラハの様子が刻一刻と明らかになってきた。ワルシャワ軍が市内を占領し、市民の行動にも制約が加えられていた。中世の面影を残すプラハ中心街のヴァーツラフ広場はワルシャワ軍戦車が占拠し、これを遠巻きに見つめるプラハ市民とワル

シャワ軍兵士らが角突き合せて小競り合いを起こ

していた。だが、過去の歴史において美しいプラハの街を守り抜いてきた誇り高いプラハ市民には、ここで激しい抵抗を試みて伝統あるこの百塔の街を破壊されることだけは忍び難く、それだけは絶対避けたかった。そんな気持ちで激しい市街戦やゲリラ戦、テロ行為に走らせることを踏み止まらせた。この対ソ無抵抗により確かに結果として市



ワルシャワ軍兵士に走り寄って抗議

街も市民も外見上大きく傷つくことはなかった。

しかし、このワルシャワ軍の武力による侵攻は、プラハ市民ばかりか、チェコスロバキアの国民の心に大きな爪痕を残した。

チェコスロバキアでは国内の社会秩序と治安に対して不安と混乱が渦巻いていた。この事態の悪化に対応すべく私は前へ進める次の手段を考えてみた。しかし、チ

ェコスロバキアのみならず、周辺諸国内の社会情勢も不安定な混

乱を来しており、そのような状況下で社会主義国へ旅行することは難しいと考えざるを得なかった。考えに考え抜いて計画したプラハへの留学が、突然一夜の内に暗礁に乗り上げ覆されようとしていたのである。奈落の底へ突き落とされた気持ちだった。お先真っ暗だった。

数日間悩み抜いた末に、大学の恩師にも相談してアドバイスをいただいたうえで、後ろ髪を引かれる思いだったが、留学計画を取り止めることを決断した。情けない気持ちで会社へ辞表の取り下げを申し出た。一世一代の辛い決断であり屈辱でもあった。

#### 4. 力づくで潰された「プラハの春」

第2次世界大戦後、米ソ2大国陣営による東西対立が生まれ、それは年々両陣営の溝を大きく拡大させて、硬直化、先鋭化して東西国家間の交流は遮断され、外交関係は狭まる一方だった。その中で東ヨーロッパ諸国は国内経済が立ち遅れ、カール・マルクスが唱えた理想的な社会主義国家建設の夢は遠のくばかりだった。ソ連の共産党主導による社会主義国家建設構想では、マルクスが提唱した「階級社会は消滅し、自由で平等な社会が実現する」社会主義国家の理想のうえに、共産党による国家、経済、社会への強権的関与と統制が押し付けられ、それは更に一層強化された。東欧圏内の社会主義同盟国には理想的な社会主義国家とは思えない、民主主義や基本的人権が制限されたレーニン・スターリン主義を取り入れたソ連式社会主義国家が希求されたのである。目指すべき社会主義国家建設の理想は現実には夢と化しつつあった。社会主義国家の盟主を自認するソ連は、東ヨーロッパ諸国を社会主義国家体制のテーゼの下にその支配強化に努め、同時に彼らとの連携によりソ連式社会主義的経済発展による共存共栄を目指していた。だが、社会主義国家経済の発展は大きく立ち遅れ、現実には体制内分業で農業生産に注力することを求められた工業志向のルーマニアでは、国内に大きな不満が芽生え、社会主義国家建設には次第に不満が目立ち始め、矛盾と限界が渦巻き出した。東欧圏内の国民の間にはいつまで努力しても一向に自分たちの生活が良くならないことに次第に不満と苛立ちが見られるようになった。

東欧圏の中でもブルガリアやルーマニアのような農業国に比べて、

ガラス製品を主に技術工業国の伝統を誇ってきたチェコスロバキアは、16世紀以降外敵に侵されたことがなく、自分たちの手で作り上げた中世以降の街と建物に囲まれ、独自の文化と伝統の中で誇りを抱いて生きてきた。社会の成熟度は、盟主のソ連より遙かに自国が勝っているとのプライドもあった。自分たちが必ずしもリスペクトしないソ連の主導的なリーダーシップに歯がゆさと苛立ちを感じてもいた。そのことを知っていた知識人たちは、ソ連の統率下に置かれたままソ連の言いなりになって、このまま自分たちの知識と技術力を発揮出来ず、その反面生活が一向に向上しない現状に不満を覚え、それが漸進的改革への気持ちを一層強めることになって行った。

ソ連の支配に対する不満が鬱積している中で、チェコスロバキアと同じような状態だった工業国ハンガリーが、同じ東欧圏内で一步先んじて急速に自由化と民主化を進めて行った。そんな折も折、1956年10月ハンガリーで「ハンガリー動乱」が暴発した。市民が政府の政策に反発して起こしたデモに対して、これを好機と捉えたソ連軍が20万近い兵士と4千台の戦車を武力介入させ、デモ隊を一気に鎮圧したのである。その過酷な武力弾圧の動きは、その後民主化の動きが噴出したチェコスロバキアの行動をも監視することになり、12年後ワルシヤワ軍のプラハ侵攻により民主化が芽生えかけていた「プラハの春」の芽を摘み取ることになった。

## 5. 「デタント」の流れ

「プラハの春」以後、チェコスロバキア国内ではソ連寄りのグスターフ・フサーク共産党第1書記・大統領の下で、ソ連の顔色を覗う偽装的な「正常化」路線が進められた。フサーク政権下では改革派の共産党員は除名され、反体制派と見られた国民は職場から追放された。民主化運動を支持して「二千語宣言」に署名した知識人、著名人も不当な扱いをされた。中でも見せしめのために著名人ほど厳しく辛々な扱いを受けた。



「ピロード革命」に向けて民主化を

アピールするプラハ市民 (Wikipediaより)

1952年ヘルシンキ・オリンピックで長距離3種目に出場して、3つの金メダルを獲得した人間機関車エミール・ザトペックは公職から追放され、鉱山で工夫として働かされた。

また、女子体操の名花として64年東京、68年メキシコで活躍し、併せて7個の金メダルを獲得したベラ・チャスラフスカも厳しい監視下に置かれた。メキシコ・オリンピック

ク開催はワルシヤワ軍の軍事進攻の直後だったため、チャスラフスカへの出国が許可されたのはオリンピック開催の直前だった。練習不足ではあったが、彼女はすべての種目で金メダル獲得を目指した。唯一

金を逸した平均台表彰式では、ソ連の金メダリスト・クチンスカヤ選手の隣でソ連国旗から顔を背け続けた行為が世界中の話題になった。

ソ連の強い監視下で、77年1月ハヴェルらを中心とする知識人グループが、人権擁護運動を進めてフサーク第1書記に人権抑圧に対する抗議を行い、フサーク指導部が批准したヘルシンキ宣言の人権条項の順守を求める「憲章77」を作成してこれを西ドイツの新聞に発表した。これがチェコスロバキア内外に大きな影響を与え、秘密警察は「憲章77」作成に関った人々を厳しく弾圧した。

共産党主導の下に結束が固く非民主的な社会主義同盟国にも、80年代ごろから体制内に次第に緩やかな自由の兆候が現れてきた。85年にソ連国内でペレストロイカが始まると、チェコスロバキアでも改革の機運が再び燃え上って来た。「プラハの春」を知るフサークは改革を認める姿勢を装いながらも、国内では相変わらず強権的な姿勢を取り続けていた。87年第1書記の座をミロシユ・ヤケシユに譲ったが、引き続き大統領としての実権を離さず、相も変わらずソ連指導部の統制に基づく国内体制の維持と、反体制派への弾圧を続けていた。80年代後半になると東欧圏内でも各国にそれぞれ独自の自由と民主化への萌芽が見られた。

私にとって「プラハの春」に次ぐ衝撃的な出来事は、あれからちょうど20年後の88年8月、ある視察団に付き添ってプラハ市内に滞在した時のことである。20年前の事件によりプラハへの強い思い込みがあった筈だったが、迂闊にも事件の日のことはその時まるで頭の中にはなかった。



「百塔の街」プラハ市街

ホテルでは宿泊客の身の上に危害が及ぶことを恐れてデモが解散するまでホテルから外出を控えるよう宿泊客にお願いしていたのだ。折角近くで「プラハの春」

8月20日、この日「プラハの春」を崩壊させたワルシャワ軍戦車部隊が蹂躞したプラハ市内の中心、市民憩いの場であるヴァーツラフ広場近くのホテルに滞在していたところ、外からしばしばドンという大きな花火の打ち上げ音とパチパチという音が聞かれ、パトカーのサイレンや、群衆の大きな嬌声がホテル内にも聞こえてきた。あまりのけたたましさにホテルのスタッフに何事起きたのかと尋ねると「プラハの春」20周年記念集会在広場で開かれていると聞き、ハッとした。そうだった。うっかりその日が事件のあった8月20日だということに失念していた。遅れてはならじと早速広場へ駆けつけ、現場の様子をしかとこの眼で確認すべく外出しようとしたところ、ホテルのエントランス周辺でガードマンに両手で制止され、

「どこへ出かけるのか？」と尋ねられ、

「ヴァーツラフ広場へ行くつもりだ」と応えると、

「広場は今危険な状態で行っては危ない」と力づくで押し止められてしまった。

の臨場感に触れられる千載一遇のチャンスを得たのに、外出させても  
らえなかった。今にして思えば、体当たりしてでも強引に突破してデ  
モの現場に身を置くべきだった。止む無くホテルの自室へ戻り、窓外  
から耳に入ってくる騒音を聞きながら悶々としてその夜を過ごした。  
20年前のあの時、もしプラハ行を決行していたら今ごろ自分はどうな  
っていただろうか。それを考えるとあの時の「プラハの春」が再び燃  
え上がっているデモの空気に何としても触れてみたかった。

その翌朝早めに朝食を済ませるとひとりヴァーツラフ広場へ歩  
いて行った。そこは「兵どもが夢の後」をまったく感じさせない落ち  
着いたいつもの広場だった。広場には「プラハの春」のよすがも、デ  
モの残り香もまったく感じ取ることができなかった。改めてプラハ市  
民の自分たちの誇りである世界遺産プラハの街を、いかなる事由があ  
ろうとも傷つけずに大切に守り抜こうという強い意志が感じられた。

しかし、「プラハの春」から20年を経て、チェコスロバキア国内に  
は自由と民主化を求める市民の気持ち再び高まっていた。同じ社会  
主義国家のポーランドにも「連帯」の合法化や、ハンガリーの複数政  
党導入などの活発な民主化運動などが、世界の注目を集めていた。こ  
の時チェコスロバキアには、ひたひたと「ビロード革命」が迫ってい  
たのである。

「プラハの春」20周年記念の翌年、東欧諸国内にはそれぞれ明らか  
に変化が現れていた。89年8月東欧圏内ではチェコスロバキアより経  
済的に遅れていたハンガリーの古都シヨブロンでピクニック事件と  
呼ばれる政治集会が開かれた。そこに東ドイツを脱出して西ドイツへ

亡命を求める東ドイツ市民が集まった。チェコスロバキアにも西ドイ  
ツへ脱出しようとする東ドイツ市民がどっと流れ込み、プラハ市内の  
西ドイツ大使館内には東ドイツ市民が溢れるようになった。10月17  
日、それまで東ドイツで強権的な態度を取っていたホーネッカー・ド  
イツ社会主義統一党書記長が失脚した。この機に乗じてチェコスロバ  
キアは、西ドイツ政府の求めに応じて東ドイツ市民を西ドイツへ輸送  
した。東ドイツは、西側陣営への市民脱出の流れを止めることができ  
ず、市民たちの不満をも和らげるため、その後西ドイツへの移動も認  
めるようになった。緊張緩和「デタント」がやって来た。

## 6. 「ベルリンの壁」崩壊、「ビロード革命」とソ連崩壊

89年は年明けから「東欧革命」の嵐が吹き荒れていた。年の瀬が迫  
った11月東ドイツ政府は、西ドイツへ脱出しようとする東ドイツ市民  
の出国を認める規制緩和を発表し、同じころ戦後44年間に亘って東西  
交流の前に立ちはだかっていた冷戦の象徴だった「ベルリンの壁」が、  
11月9日西ベルリン市民の手によって破壊され脆くも崩壊した。

「デタント」の流れに乗った東欧社会主義国には、自由、平等と民  
主化を求める動きが表面化して混乱していた。チェコスロバキア周辺  
のほとんどの共産党支配国家が、共産党一党独裁支配を放棄し出した。  
そこへ西欧社会の自由な空気が入り込み、21年前の「プラハの春」を  
思わせるような空気が醸成されて行った。

ハンガリー、ポーランド、東ドイツの国内の民主化などと歩調を合



せるようにチェコスロバキア国内でも再び改革への狼煙が上がった。

89年11月16日スロバキアのプラチスラバで高校生と大学生の団体がデモ行進を行い、翌17日の「国際学生デー」にはプラハ市内のカレル大学に数百名の学生が集結した。連日デモが行われ、20日にはプラハで参加者10万人を超える大掛かりなデモが行われた。「市民フォーラム」は政府に対して「共産党の一党独裁廃止」を要求し、他方で非共産党系の地下新聞が発行され始めた。11月24日フサーク大統領、ヤケシユ第1書記ら共産党幹部全員が辞任し、チェコスロバキア共産党政権は事実上崩壊した。27日には全国各地で国民の75%が参加したゼネストが打たれた。このまま連日ストが行われて年末になってチェコスロバキア共産党と、プラハの「市民フォーラム」及びスロバキアの「暴力に反対する公衆」の間で実務者協議が行われ、その結果「共産党の1党独裁放棄」と「複数政党制度の導入」を行うことで妥結した。早速行われた複数政党制による連邦議会総選挙では、チェコは「市民フォーラム」が、スロバキアでは「暴力に反対する公衆」が第1党となり、スロバキア出身のアレクサンデル・ドゥプチェクが連邦会議議長に、チェコ出身のヴァーツラフ・ハヴェルが大統領に就任し、非共産党系の新政権が発足した。大きな流血の事態を起こすことなく、軽く柔らかな生地ピロッドにあやかった「ピロッド革命」がここに成った。「プラハの春」以来苦節23年を克服して新生チェコスロバキアが誕生したのである。

12月3日地中海のマルタで開かれたブッシュ大統領、及びゴルバチョフ共産党書記長の米ソ首脳会談で冷戦終結の宣言が行われ、第2次

世界大戦後44年間続いた東西冷戦が幕を降ろしたことによって東西の融和は決定的になった。

ハヴェル大統領の強い要請を受けて呼び戻された亡命中の指揮者ラファエル・クーベリックが、翌春「プラハの春」国際音楽祭で、新生チェコスロバキアへの熱い思いを込めて、チェコ・フィルハーモニーを率いてスメタナの交響詩「我が祖国」を演奏し、世界中の人びとに強い感動を与えた。同時に、世界へ向けて自由、平等、民主の大切さを、そして抑圧される環境下でも抱き続ける「不屈の精神」をアピールしたのである。

そしてこの勢いづいた民主化渴望の流れは、1991年12月に入ってゴルバチョフ大統領の辞任によって、東欧社会主義国家の盟主としてにらみを利かせ、強権を振るっていたソヴィエト連邦をもドラマチックに崩壊させる衝撃となって表れた。土足で入り込み「プラハの春」を壊滅させた、戦後世界に君臨していた暴君の退場だった。

## 7. ドイツ統一と新生チェコスロバキアの歩み

1989年チェコスロバキアの「ピロッド革命」と同時に、同じ東ヨーロッパの社会主義国家のハンガリー、ポーランド、ルーマニア、ブルガリアなどにも変革の嵐が襲い、その勢いは東ドイツで11月10日ベルリンの壁を崩壊させ、東欧社会主義諸国にとっては予想以上のスピードで体制を衣替えることになった。そして、翌90年10月3日東ドイツ州が西ドイツに加入することによって全ドイツが統一さ



モルダウ川畔のプラハ城（上）  
カレル橋とプラハ城（Wikipediaより）

れた。第2次世界大戦後分断されていた東西ドイツは、漸くひとつの「ドイツ連邦共和国」として新たな一步を踏み出すことになった。チェコスロバキアでは、かねてより国内で西のチェコと東のスロバキアが、地域と民族性、国家への理念の違いからしばしば対立していた。20世紀に入り第1次世界大戦を経てチェコスロバキア共和国が成立したが、両国の融合を目指して推進したいわゆる「チェコスロバキア化」は多くのスロバキア人にとって受け入れられず、スロバキアは侵攻したナチス・ドイツの威光と力を借りる形でチェコと分かれスロバキア共和国としていったん分離独立した。第2次世界大戦後の48年、国民総選挙によりチェコスロバキア共産党が政権を獲得し、人民

民主主義体制を採用し、社会主義国「チェコスロバキア共和国」として再統一された。60年には国名を「チェコスロバキア社会主義共和国」に変更し、68年に成立した新憲法によって69年、スロバキアはチェコと対等な社会主義共和国として2つの共和国の連邦制国家へ移行した。しかし70年代の「正常化」の過程で中央集権化が進められた結果、政治行政の権力は再びチェコ側に集中した。これらの経緯が、共産政権崩壊後の両国の分離を促す背景となった。

地域性も民族性も異なる2つの共和国はお互いに切磋琢磨しながらも双方の立場の違いもあり、悉く対立していた。歴史的にチェコ人の居住するボヘミアとスラブ系民族のスロバキアは、長い間ハプスブルク家領地としてオーストリア・ハンガリー帝国に支配されていた。しかし、チェコスロバキアを一体不可分の単一国家と考えるチェコ人と、対等な2つの国による連合国家と理解するスロバキア人の間では相変わらず主張が衝突していた。人口が圧倒的に多いチェコ人がとかく主役となりがちな国家の舵取りはスロバキア人にとって耐えられなかった。新生チェコスロバキアが生まれて僅か3年余、1993年1月1日を期してチェコ共和国とスロバキア共和国は連邦制を解消し、平和裏に分離することになった。

## 8. 外交問題に揺れるチェコ

「ビロード革命」から四半世紀が経過して、チェコとスロバキアの両国はそれぞれ民主主義国家として漸進的に歩んでいる。それぞれヨ

ヨーロッパ諸国との経済ビジネスを通じて順調な発展を遂げ、海外諸国との外交関係を発展させている。世界遺産都市プラハを抱えるチェコを訪れる観光客の数は、年間650万人に達し、チェコ経済を支えている。人口こそチェコ（1千40万人）がスロバキア（540万人）を大きく上回っているが、ともに分離独立後は西欧諸国とのビジネスを通じて発展し、国内外に大きな問題を抱えることはなかった。両国はともに2004年5月1日、他の東欧諸国など8か国とともにヨーロッパの地域連合体である欧州連合（EU）へ同時加盟した。

ところが、近年になってチェコ人の間には対外的な対応面で変化が表れてきた。EUに対してその対応に微妙な変化と距離感が見られるようになったのである。それと同時にかつては仇敵とも見られたロシアへの接近のニュースも伝わってくるようになった。

その最大の要因は、移民・難民の受け入れに対するEUの厳しい要求である。今やヨーロッパ各国では移民受け入れが大きな政治問題化している。イギリスがEU離脱を決めたのも移民受け入れによる「国家の無力化」と「将来への不安」が大きいと見られている。

今ではEU加盟国のほとんどが移民に否定的であり、移民受け入れに前向きなドイツのメルケル首相ですら今年6月ドイツ議会で「欧州は多くの課題に直面しているが、移民・難民問題はEUの運命を左右するものとなる可能性がある」と指摘している。

EU圏内へ貧しいアフリカ系移民や、テロによって住居が破壊され避難してきたアラブ系難民が押し寄せ、年々その数が増えるにつれてEUは飽和状態になった受け入れ難民を国の経済力に応じて加盟各国

が分担して受け入れることを求めた。これをEUの圧力と感じたチェコは要求を受け入れがたいと反発し、これに対抗するようにバビシュ首相はEUによるロシアへの経済制裁解除を言い出したのである。バビシュ首相以上に反EU色の強いゼマン大統領はロシアを訪問し、プーチン大統領と会談してロシアとの接近、友好をアピールした。しかし、かつて旧ソ連によって人権を抑圧され、国を蹂躪された憎きロシアに苦汁を舐めさせられたチェコ市民にとって、これを過去の事件として忘れ去ってロシア



1996年6月 プラハ城を背にカレル橋にて

を友好国としてすんなり受け入れることができるだろうか。国内にはEUの要求に対して、チェコには大国ロシアとの良好な関係が必要との声が上がっている。一方で、かつて「プラハの春」を挫折させ、14年にはクリミア半島へ侵略、支配したように、ロシアがしばしば強権国家の本性を表すことに警戒心も強く同じ轍を踏むまいとして反口感情が高まっている。確かにチェコ人にとってEUに対する印象は若干悪化している。04年EU加盟時には



夜のヴァーツラフ広場（上）と隣接する  
旧市庁舎前広場（Wikipediaより）

39%だった好感度が今年には31%にまで下がっている。一方悪い印象は20%から30%にまで跳ね上がっている。それでもチェコにとって、EUに反発しながらもEUとのビジネスによってもたらされた今日の経済成長を考えると離脱までは考えられず、引き続き友好的にEUと経済的つながりを維持したいと考えている。

「プラハの春」前後とその後「ビロード革命」への過程で、尊い生命を失った犠牲者や、陰に日向に自由と民主化を追求し活動した多くの先人たちの弛まぬ努力と賢明な言動はとめどもなく尊いものである。あの時代に比べればチェコは自由と民主化を享受して政治的に社会的に安定していることは間違いない。その点で現代チェコ人があまりにも自由を手軽に享受できるせいだろうか、「考えること」と「過

去の尊い犠牲のうえに勝ち得た民主化」をさほど深刻に捉えていないのではないかとつい野暮な心配をすることがある。先人たちのひたむきで献身的な努力なしには、自由、平等を掌中にした民主的な「ビロード革命」は決して成らなかつた。

今年8月ヴァーツラフ広場で行われた「プラハの春」犠牲者のための追悼式典で、親口派バビシユ首相のロシア寄りのスピーチに対して大勢の出席者から強い抗議の声飛び交って会場が混乱した。「ロシアの体質は変わらない」「政府はロシアを利用しようとしている」とロシアと一線を画すべきとする聴衆の不満の声は、まだロシアを許してはいないことの証の表れではないか。

古色蒼然たる中世の街プラハには、今も長い歴史と伝統が息づいている。モルダウ川にかかるカレル橋、そこから眺める壮大なプラハ城の威容、モルダウ川沿いの思索的な散歩道、古今が巧みに融合しているヴァーツラフ広場、カフカを生んだ石畳の市街、そして街角に灯されるガス灯の明かりなどを想うと、このままいつまでもプラハの落ち着いた色合いを醸し続けてほしいと願わずにはいられない。

激しい試練だった「プラハの春」と「ビロード革命」を乗り越えて民主的な新生国家を創り上げたチェコ人の心とプラハの街は、今もまだ揺れているだろうか？

（日本ペンクラブ理事）